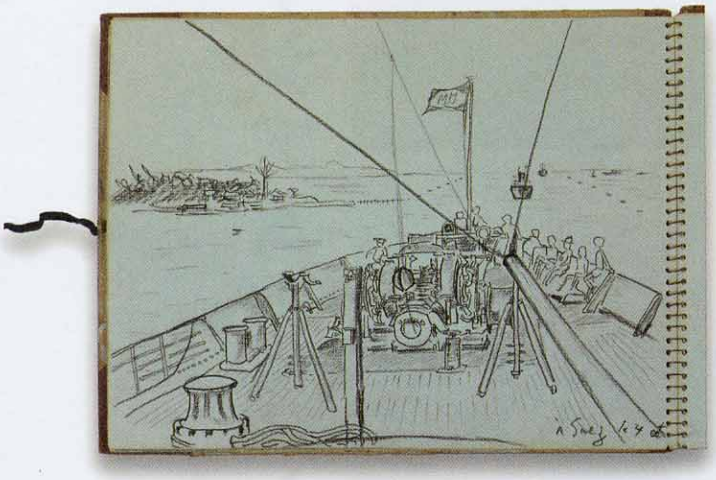
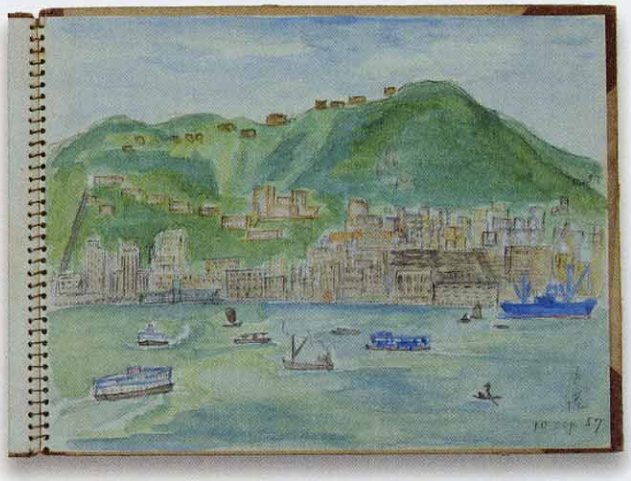
10月4日 スエズ
「11時再び錨があがり、船は動きはじめる。スエズ運河を眺める人で甲板は鈴なりの盛況だ」
(同左)





9月10日 香港
「海の色は、緑灰色で、遠くが一線を区切って濃い紺になり、白い波がキラキラと一面に光っている」
(『パリの手記Ⅰ 海そして変容』河出書房新社、1973年7月15日)

3. 辻 邦生「スケッチブック」について

学習院大学史料館では、作家 辻 邦生氏の資料を収蔵しています。『西行花伝』『背教者ユリアヌス』などの歴史小説や、朝日新聞での連載小説『雲の宴』で知られる辻氏は、文学部教授としての15年間を含め約35年もの間、学習院大学で教鞭を執っていました。当館では、辻氏の生前から執筆活動に関わる資料の寄託を受け、整理、保存しています。

ここに紹介するのは、辻氏が初めてフランスへ渡った時に携えたスケッチブックです。1957年9月4日横浜港を出航してから10月9日フランスへ到着するまでの寄港地の様子や、パリ到着後に訪れたシャルトル大聖堂・オペラ座通りなどが精密に描かれています。

公務員の初任給が約1万円だったこの時代、渡航運賃だけで30万円近い費用がかかるフランス留学は、決して簡単なことではありませんでした。しかしながら辻氏は、フランスへ留学しなければフランス文学を学ぶ資格はないという大学研究室の雰囲気の中で、真剣に留学を志してゆきます。当時のことは後年このように書かれています。

「研究室にいっても、フランスで研究するのでなければフランス文学とはいえない、というようなイキのいい議論が学生たちの間で幅をきかせていた。フランスにゆくのはなんとなく夢物語のような気がしていたのに、急に現実の問題となり、みんなも留学生になるのがフランス文学をやることだと考えるようになった。」(辻邦生著『のちの思いに』新潮社、1999年12月7日)

そして1957年7月、ついに辻氏はフランス保護留学生の資格を得て、念願のフランス留学を果たします。渡仏に際しては、生来の冒険心とロマンティシズムから、あえて飛行機ではなく1ヶ月間の船旅を選び、フランス郵船カンボージュ号でフランスを目指しました。それも、留学生が一般的に利用する三等ではなく、季節労働者が大部分を占める四等船客(デッキ・パッセンジャー)になることを選択します。四等船室での旅は、風変わりな人物との出会いや様々な経験を辻氏にもたらします。横浜港を出航する時には20人にすぎなかったデッキ・パッセンジャーは、寄港のたびに増え続け、3週間後コロンボに着く頃には200人もの数になっていたそうです。

なお、一緒にフランスへ留学することになる佐保子夫人が飛行機でフランスに向かったのは、横浜港で辻氏を見送った1ヶ月半後のことであり、辻氏が過ごした33日間の船旅に対して、所要時間はたったの2日間でした。

(生田享子)